

青森県むつ市・北海道松前町・上ノ国町・江差町・
函館市の水中文化遺産

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/25637

金大考古

第68号

The Archaeological Journal of Kanazawa University volume 68 Sept. 2010

青森県むつ市・北海道松前町・上ノ国町・ 江差町・函館市の水中文化遺産

佐々木達夫・野上建紀・佐々木花江

平成22年7月、海底・海岸の文化財に関する資料調査を、青森県・道南地域で実施した。本稿はその報告である。

むつ市脇野沢海底引き揚げ品など

むつ市教育委員会脇野沢教育課長、杉澤健一さんのご厚意で、通常は元脇野沢小学校に保管されている脇野沢海底採集陶磁器8点を実測、撮影した。調査にあたり、杉澤健一さん、青森県埋蔵文化財センターの工藤大さんにご助力いただいた。

青森県史の「脇野沢沖海上がり陶磁器」に発見経緯、遺物概要が紹介され、4点の徳利写真が掲載されている（青森県史編さん考古部会編、2003『青森県史資料編考古4 中世・近世』青森県史友の会、494-495頁）。脇野沢では1950年から60年代にホタテ漁網にかかった陶磁器が採集された。脇野沢中心部から川内方面に1.5km離れたヌイド沢と松ヶ崎の間の沖合250m、水深11mの海底である。集中して発見された地点は2～3箇所あったという。櫛状道具の付いた桁網で海底から浮き上がったホタテを採る「じかまき」漁で網に陶磁器が掛った。当時、岩本義雄が地元漁師から20点ほどの陶磁器を集めた。その後、ホタテの漁法が変わり、海底から陶磁器が引き揚げられることはなくなった。採集地点は下北半島で交易や漁港として栄えた川内港に近い。嵐に際して積み荷を投げ捨てた可能性が指摘されている。

現在残存している陶磁器は徳利である。碗や皿も網に掛っていたが、割れていたために海に捨てられたという。徳利は江戸時代末期から明治前半のもので、当初、5点は秋田の五城目焼と言われたが、現在は越後産と推定されている。新潟県新潟市巻の松郷屋焼の海鼠釉陶器、新潟県阿賀野市笹神の笹岡焼の灰緑釉陶器や飴釉陶器である。越後産徳利は新潟に運ばれ、焼酎

が詰められて焼酎徳利と呼ばれたという。新潟港から松前など北海道に北前船で運んだことから松前徳利とも呼ばれている。2点は江戸時代末期の波佐見笹絵磁器と信楽鉄釉陶器である。

脇野沢交流センターには弁財船の模型が展示されている。船名は我童丸で、旧脇野沢村本村の松浦家（ダイナガ）の蔵に保管されていたもので、東京都在住の松浦晃也氏の寄贈品である。製作及び入手経路等の文書類による記録はないが、松浦家では明治年間に旧脇野沢村本村の廻船問屋「角屋」松村藤次郎氏所有の弁財船を忠実に縮尺した模型であると口承している。船体構造は本体（全長185cm、最大胴幅55cm）、帆柱（木製、一部金具使用、高さ160cm、4.5cm四方）、帆（木綿製、高さ115cm、幅105cm）、舵（木製、高さ51cm、最大幅22cm）、錨（鉄製、4本針、高さ20cm、最大幅11cm）、錨綱（木製、数珠式、長さ25cm）、船首・船腹・船尾に銅板化粧の金具多数打ち込みがある。

同センター展示品に、木製の「御印箱」の中に瀬戸産の染付小坏（仙芝祝寿文）が納められ、御印箱表面に「明治廿一年四月 観音丸 御印箱 松浦嘉市」と墨書される。他に海上安全の祈願書も併せて展示されている。

青森県立郷土館展示の脇野沢海底引き揚げ品

青森県立郷土館に脇野沢採集陶磁器3点が展示されている。大型徳利1点、新潟県巻の松郷屋焼の完形品であり、高さ39cm、径26cm。□酢の2文字が黒色で記される。小型徳利2点は、1点が完形品で高さ25cm、径18cm。フジツボの付着が著しい。もう1点は口部が欠損し、残存高は23cm、径13cmで、脇野沢保管品と同じ種類で笹岡焼と推定される。

青森県立郷土館展示の鉄錨

民俗展示室に深浦の海揚がり4爪鉄錨1点が展示されている。横123×縦123×高250cmである。その他、脇野沢海底引き揚げ品と同種類の明治期の波佐見染付笹徳利も展示される。コバルト釉で収集地は上北郡六ヶ所村である。産地不明の醤油徳利は、亀甲内に「寛」字と醤油銘があり、収集地は下北郡川内町である。見

学撮影に際し、青森県立郷土館副参事の相馬信吉さん、青森県立郷土館研究主幹の本田伸さんにご助力いただいた。

青森市、みちのく北方漁船博物館

みちのく北方漁船博物館に当該地域を中心に利用されていた各種の木造帆船が展示されている。東北地方の海・川で使用していた船が数多く展示されているが、海揚がり品の展示保管はない。

函館市、高田屋嘉兵衛資料館

高田屋嘉兵衛資料館には函館沖海底から引き揚げられた4爪鉄錨が6本展示されている。それぞれ長さ235cm、225cm、200cm、170cm、112cm、90cmである。函館市北方民族資料館に海揚がり品の展示保管はない。

函館市立博物館

函館市立博物館には恵山沖海揚がりの4爪鉄錨が保管され、長さ240cmである。和船の碇は百石積（排水量24トン相当）で4～5個、千石積で7～8個積まれ、一番重い碇を一番碇と呼び、二番、三番と軽くなる。一番碇の重さは千石積で約300kgという。

木古内町サラキ岬の咸臨丸

木古内町サラキ岬の海岸に1857年オランダ建造の洋式帆船咸臨丸を紹介する公園があり、模型を野外展示している。戊辰戦争で破れ、北海道移住を余儀なくされた仙台藩白石片倉小十郎家臣団401名を乗せて、仙台の寒風沢を出航した咸臨丸は、函館経由で小樽に向かう途中、木古内町サラキ岬沖で座礁し沈んだ。1871（明治4）年9月20日のことである。船体の一部が今も海底に沈んでいるらしい。

松前町海岸採集品

松前町教育委員会教育長、森定勝廣さんに挨拶し、松前町教育委員会文化社会教育課文化財担当の佐藤雄生さんが松前町海岸で採集した陶磁器（コンテナ2箱）を見学する。連続する地域であるが、現在の地形から3地点に分けて採集された。16世紀以前の製品はほとんどなく、中国染付皿の小片と思われる1点が見られるのみである。17世紀は中頃、後半の有田染付、肥前陶器、18世紀の有田染付、波佐見染付、肥前陶器、19世紀の有田染付、波佐見染付等がある。東北地方の甕、播鉢もみられる。19世紀後半の印版刷絵や型紙刷絵、ゴム印の陶磁器もある。

佐藤雄生さん採集品は江戸時代の陶磁器が主であつ

た。我々は松前海岸の同じ3地点、東側から小松前川河口、道の駅前、唐津内沢川河口で、明治時代以降の陶磁器も散乱している状態を確認した。明治の印版刷絵染付がもっとも多く見られた。

小松前川河口を挟む位置に、福山波止場跡があり、一部復元されている。川を入れて東側に江戸時代は沖口役所があった。波止場跡には松前城の石垣と同じ松前の石切り場の石を積んでいる。江戸時代末期から明治初年に築造されたか。江戸時代の絵画には波止場が描かれていない。明治10年の写真に波止場が写り、家々が並ぶ海側に帆柱が林立している様子が写真からわかる。波止場跡の石積み堤防の周囲は岩が露出している。丸い穴には木杭、四角の穴には直方体の花崗岩が立つ。船を係留した棒の跡である。

松前町郷土資料館3階に松前城（福山城）遺跡出土陶磁器が展示される。16世紀中国染付、17世紀の唐津、17～18世紀有田染付、17世紀柿右衛門色絵、19世紀函館焼染付、19世紀ヨーロッパ色絵陶器等が展示されている。埋蔵文化財保管室には大量の福島城出土品が保管されている。日本海交易で運ばれた陶磁器が城及び城下で使用され破損し捨てられ、松前海岸で採集されるのであろう。

松前町茂草海岸

松前町茂草海岸で踏査。松前から上ノ国に向かう途中で、上ノ国まで42kmの地点である。細かな小石の海岸で、採集品は、新しい染付片が1点のみである。檜山地方は海岸に絶壁と砂浜が広がり、漁村が点在するという類似した風景が続いている。こうした海岸の砂浜に陶磁器が打ち揚げられることはないようである。そのなかで、松前海岸のみに大量に散布する陶磁器片は道南地域の歴史を反映している。

上ノ国町・道の駅上ノ国もんじゅの昇平丸

道の駅上ノ国もんじゅは、上ノ国漁港を東側に見下ろす位置にあり、漁港から南7kmに位置する上ノ国木ノ子海岸沖で沈没した昇平丸の模型が展示されている。昇平丸は1854年建造の洋式帆船で、幕府軍艦であった。明治2年に咸臨丸とともに所管が開拓使となった昇平丸は、明治3年に南部安渡を出帆し、脇深海岸を経て大島沖で遭難し、上ノ国木ノ子村猫澤に漂着したが、高波によって海岸に吹き付けられて破船した。

上ノ国漁港遺跡採集陶磁器

上ノ国漁港遺跡出土の近世陶磁器は上ノ国館跡調査

整備センターに保管されている。見学撮影にあたり、上ノ国町教育委員会文化財グループ学芸員、塚田直哉さんにご助力いただいた。大量の陶磁器が採集・保管されている。17世紀の唐津焼、17世紀前半の有田の染付網目文碗・草花文皿。波佐見の青磁染付。17世紀後半の染付網目魚文碗、17世紀後半～18世紀前半の内野山の灰釉皿、波佐見の青磁見込み蛇の目釉剥ぎ皿、18世紀の有田の染付碗・皿、波佐見のくらわんか碗・皿。19世紀の染付端反碗、方形大皿。20世紀以降の型紙摺り陶磁器、銅版転写陶磁器。こうした資料は報告されている（上ノ国教育委員会，1987『上ノ国漁港遺跡』上ノ国教育委員会）。

上ノ国町旧笹浪家住宅

上ノ国町の旧笹浪家住宅では、生活に使用していた陶磁器のうち、現在僅かに残った陶磁器を棚に入れている。有田や志田の大きめの中皿、19世紀前半の染付が2点、19世紀後半の型紙刷りと手書きの染付。有田瑠璃釉お神酒2点。有田型紙刷りのなます皿。九谷焼赤絵急須、明治時代で銘「大日本九谷」。九谷赤絵碗。九谷赤絵、銘「九谷木米」の杯。瀬戸徳利。唐津二彩大鉢 18世紀、底部下面に墨書「能登や ◆久右衛門」。◆部分は山二。旧笹浪家住宅に隣接する収蔵庫で、勝山館や上ノ国の民家住居、上ノ国漁港遺跡の発掘で出土した資料の一部を展示していた。

勝山館跡（宮の沢右岸地点）では、絵唐津、志野、中国染付などが見られる。上ノ国市街地では、古瀬戸の灰釉皿、珠洲播鉢、中国白磁、16世紀末～17世紀初めの唐津皿、17世紀の有田の染付碗・皿、17世紀後半～18世紀前半の波佐見の青磁小皿、18世紀末～19世紀前半の広東碗、19世紀の染付端反碗、その他、18～19世紀の染付蛸唐草文瓶、紅皿など多種多様な陶磁器が出土している。陶磁器以外では、銅銭、キセル、木製樽底板、木製浮子（アバ）が出土している。上ノ国漁港遺跡では、備前播鉢、越前播鉢、唐津、瀬戸・美濃、有田、伊万里が出土している。

上ノ国勝山館のガイダンス施設で勝山館出土品と併せて、安藤氏が治めていた関連のある十三湊の出土品を展示していた。勝山館は16世紀末に終焉し、松前藩に引き継がれるが、16世紀の陶磁器が多く採集されるような海岸については未確認である。

なお、上ノ国に隣接する厚沢部町の郷土資料館に海揚がり品ではないが、波佐見笹徳利や有田の染付鯉滝

登り絵図大皿が展示されている。

江差町開陽丸

徳川幕府軍艦の開陽丸は日本の水中考古学における調査研究でもっとも著名な沈没船である。海洋の沈没船の本格的な水中発掘調査が日本で初めて行われた遺跡である。開陽丸は徳川幕府が発注した当時の最新鋭艦であった。オランダのピップス造船所で建造され、日本に回航され、幕府軍の旗艦として活躍した。江戸の無血開城の後、不満をもつ旧幕府軍の榎本武揚らは新天地を求めて北海道へ向かったが、明治元年11月5日、新政府軍を迎え撃つ前に暴風雪のため座礁し、その後、沈没した。

大正7年に沈没記録をもとに大砲などの遺物が海底から引き揚げられ、本格的な調査は昭和49年に始まった（江差町教育委員会・開陽丸引揚促進期成会1982『開陽丸-海底遺跡の発掘調査報告I』）。昭和49年度から59年度にかけ、およそ33,000点の遺物が引き揚げられた。最も多いのは金属製品で、主要な鉄（5,879点）、銅・真鍮（17,392点）、鉛（3,546点）だけでも全体の点数の80%を超えている。木造軍艦で砲弾や銃弾が数多く積載されていた。金属製品に次いで多いのは陶磁器類である。碇子を含めて2,917点を数え、全体の8.8%を占める。

船体は昭和47年に築かれた防波堤によって分断され、外港側の調査は終了したが、内港側は未調査で保護シートをかけたままである。

江差町教育委員会生涯学習課主幹、藤島一巳さんのご助力で、江差の開陽丸青少年センター及び江差郷土資料館保管室で、開陽丸と鷗島周辺の引き揚げ陶磁器を見学撮影した。

沈没船が発見された場所は鷗島の対岸の現在コンクリート堤防が築かれた両側に位置しているが、藤島一巳さんのご教示によれば、最初に遭難した破船地点は鷗島側であった。開陽丸を救助に来た神速丸も同じ海に沈んでいるといい、少なくとも2隻以上の船の遺物が混在している可能性がある。陶磁器は最初に引き揚げたものは、それらの沈没船より新しい時代のものが若干含まれ、明治時代の印版刷絵陶磁器や明治～大正時代の銅版転写製品が混じる。発掘品は明治初年に沈んだものが主要なもので、江戸時代末の製品である。肥前の染付蓋付き端反碗、皿、鉢など日用品が多く、船上での使用品と思われる。

鷗島周辺

旧檜山爾志郡役所は明治時代の洋風建築で、江差町郷土資料館を併設している。藤島一巳さんと宮原浩さんのご助力で、鷗島周辺採集の保管品を撮影をした。

江差港に隣接する鷗島周辺に7隻の船が沈んでいるという情報があり、昭和52年に鷗島と港を結ぶ堤防の内側約100mでダイバーが調査したところ、船体は発見されなかったが、海底の泥のなかから陶磁器が引き揚げられた。それらは江差郷土資料館保管室の81～92ケースに入っている。肥前の染付端反碗、蛇の目凹形高台の染付深皿、波佐見の笹徳利など幕末～明治初の陶磁器が多い。17世紀後半～18世紀前半の波佐見の染付小皿や内野山の銅緑釉皿、18世紀のくらわんか皿があり、大正時代に入るものも数点ある。17世紀初の唐津皿もある。18世紀後半以降の高台の付く唐津播鉢もある。年代の違う陶磁器が海底泥内からダイバーによって引き揚げられた。沈没船の積み荷とすれば、各時代に沈んだことになるが、沈没船でない場合でも、港に何度にも渡って廃棄されたことになる。

旧檜山爾志郡役所の珠洲焼

鷗島付近の海揚がり珠洲焼播鉢が旧檜山爾志郡役所に展示されている。底部のみが残り15世紀頃である。卸目は擦り減っておらず、使用した痕跡は見られない。

海揚がり品ではないが、尾道酢と記載した大型瓶が同役所に展示されている。備前焼ではなく、薄い褐釉が掛る。

江差町旧中村家展示の海揚がり品

近江商人であった中村家の旧中村家住宅に、前述の鷗島付近の海揚がり近世陶磁器の一部が展示されている。旧中村家住宅はニシン漁全盛時代を伝える廻船問屋であった。酒も扱い、店先に木製看板が掛る。箱に年号や種類が記載された陶磁器が保管されている。18世紀、19世紀の有田や有田周辺の陶磁器がいまでも保管されている。海揚がりではないが、敦賀で醸造された蘭麴酒を入れた灰釉徳利も保管されている。

旧中村家住宅展示の鷗島付近の海揚がり近世陶磁器は、17世紀の有田の染付碗、18世紀の波佐見の染付網目皿、19世紀の有田と周辺の碗皿、蓋付碗、波佐見の笹徳利、越後の徳利、明治の印版皿などがある。

江差の海揚がり4爪鉄錨3点も旧中村家に展示している。江差津花町の竹内さん寄贈品で網に掛けて引き揚げられた。長さ270cmほどで大きい。銚子沖のサン

マが取れなくなると、江差でニシン漁が活発化し、水揚げしたニシンの95%は肥料として利用された。江差は大正2年までニシンが豊漁だった。3月頃に漁が最盛期で、5月は賃金を貰うため町が賑わった。しかし、それ以後ニシンの回遊が見られず、江差のニシン漁は終わる。ニシン漁はさらに北方の石狩、留萌では昭和まで盛んだった。

旧中村家で案内をしている西海谷さんの家はお菓子屋で、いまでも生活で使っていた急須と煎茶碗、杯などの九谷焼がある。しかし、海揚がり品のなかに九谷焼は見られない。

青森・道南の海に関わる文化財

今回、青森・道南地域で実施した調査で確認された海底や海岸の文化財は、金属製品が全体の遺物の80%以上を占める開陽丸遺跡を除けば、その多くは陶磁器であった。これは材質の特性によるところが大きい。その他は海揚がり四爪鉄錨が、青森で1点、江差で3点、函館で7点確認された。また、開陽丸(1868年江差沖沈没)、神速丸(1868年江差沖沈没)、咸臨丸(1871年木古内沖沈没)、昇平丸(1870年木の子猫澤漂着)など船名と沈没年代が明らかな沈没船がいくつかあるが、発掘調査が行われた開陽丸を除いて、海底で船体は確認されていない。

陶磁器の年代は17世紀以降のものが多く、特に江戸後期、幕末～明治前期の肥前磁器が多い。この傾向は日本海沿岸の能登地域で見られることと同様である。同じ日本海交易ルート上にある交易拠点や消費地の性格として位置づけられる。一方、脇野沢沖で引き揚げられた越後産の徳利(松前徳利、焼酎徳利)などは陸上の遺跡や民俗資料の中によく見られ、この地域の特性と言ってもよい。この地域が求めたものは越後産の徳利そのものではなく、その内容物であったが、その内容物の流通過程上で越後が容器の生産に有利な産地であったのであろう。

また、15～16世紀の遺物は、珠洲焼播鉢や中国青花が見られる程度で、少ないものであったが、勝山館など中世に栄えた遺跡には多くの中世陶磁器が使用されていたことから、今後、海岸や海底でも発見される可能性がある。

(金沢大学 tatsuosasaki@hotmail.com, 有田町歴史民俗資料館 nogami.takenori@gmail.com, 金沢大学 hanaesa@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)

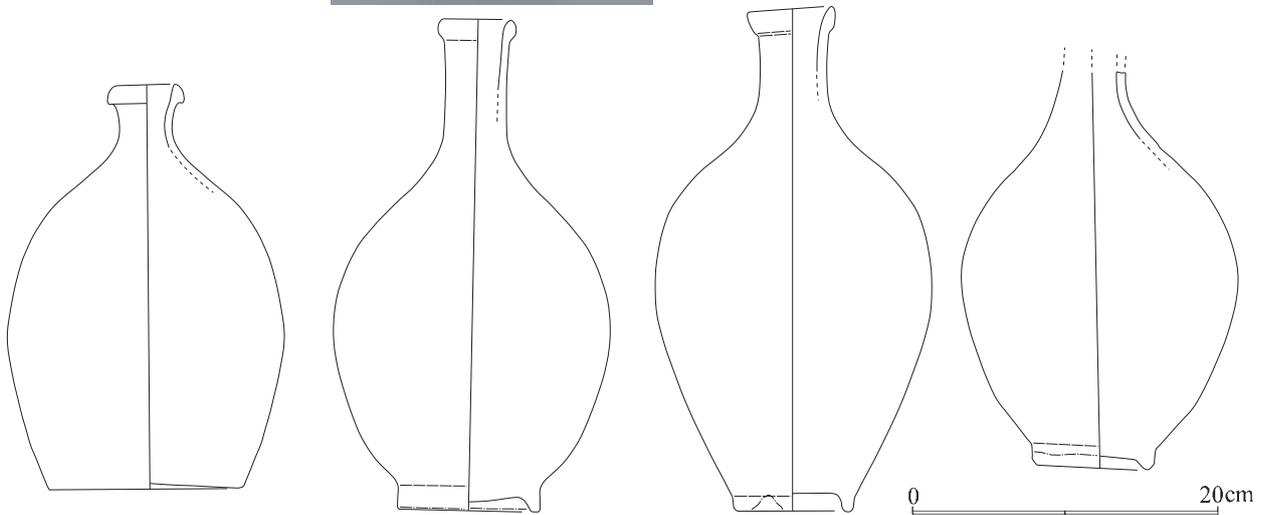


Fig. 1 脇野沢海底引き揚げ品、むつ市脇野沢保管品

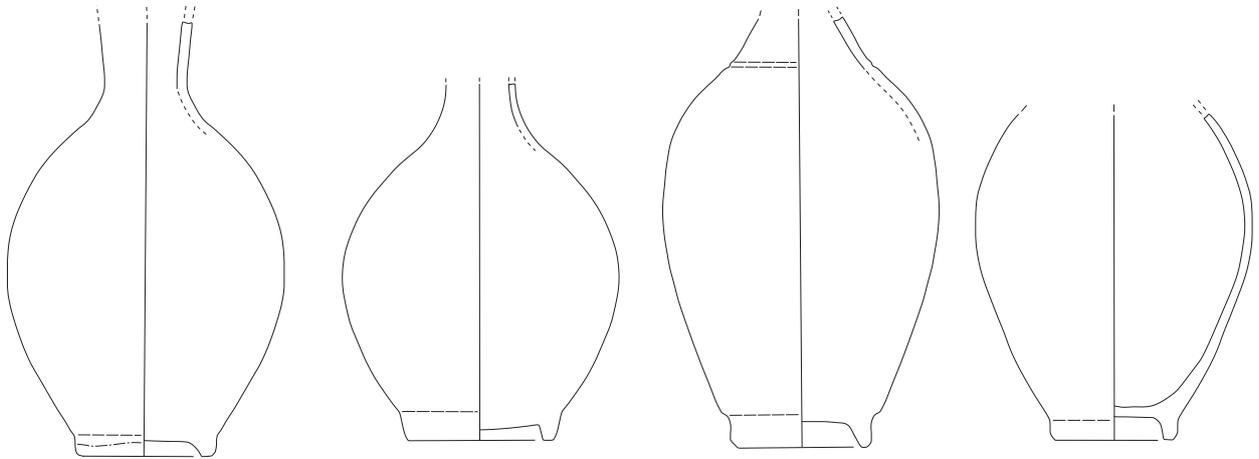


Fig. 2 脇野沢海底引き揚げ品、むつ市脇野沢保管品

0 20cm



Fig. 3 脇野沢海底引き揚げ品、青森県立郷土館保管品



Fig. 4 青森県立郷土館展示の玉の井酢瓶



Fig. 5 松前町小松前川河口海岸採集品・金沢大学考古学研究室保管



Fig. 6 松前町小松前川河口海岸



Fig. 7 松前町道の駅前海岸



Fig. 8 松前町道の駅前海岸採集品・金沢大学考古学研究室保管。



Fig. 9 松前町唐津内沢川河口海岸と採集品・金沢大学考古学研究室保管。





Fig. 10 松前町小松前川河口海岸、佐藤雄生さん採集品。



Fig. 11 上ノ国漁港遺跡（報告書より）



Fig. 12 上ノ国漁港、2010年7月



Fig. 13 上ノ国漁港遺跡出土品



Fig. 14 上ノ国漁港遺跡出土品



Fig. 15 上ノ国漁港遺跡出土品



Fig. 16 上ノ国漁港遺跡出土品



Fig. 17 上ノ国漁港遺跡出土品



Fig. 18 上ノ国漁港遺跡出土品



Fig. 19 江差町開陽丸復元



Fig. 20 江差町開陽丸引き揚げ品



Fig. 21 江差町開陽丸引き揚げ品



Fig. 22 江差町開陽丸引き揚げ品



Fig. 23 江差町開陽丸引き揚げ品



Fig. 25 江差町開陽丸引き揚げ品



Fig. 24 江差町開陽丸引き揚げ品



Fig. 26 江差町鷗島前浜



Fig. 27 江差町鷗島前浜引き揚げ品



Fig. 30 江差町鷗島前浜引き揚げ品



Fig. 28 江差町鷗島前浜引き揚げ品



Fig. 31 江差町鷗島前浜引き揚げ品



Fig. 29 江差町鷗島前浜引き揚げ品



Fig. 32 江差町鷗島前浜引き揚げ品



Fig. 33 珠洲焼播鉢、江差町鷗島前浜引き揚げ品、中村家展示品。



Fig. 34 染付徳利、碗、皿。江差町鷗島前浜引き揚げ品、中村家展示品。



Fig. 35 恵山沖海底引き揚げ4爪鉄錨。函館市立博物館蔵。長さ240cm。



Fig. 36 江差海底引き揚げ4爪鉄錨。津花町竹内氏寄贈。江差中村家住宅展示。



Fig. 37 函館沖海底の海揚がり4爪鉄錨。函館市高田屋嘉兵衛資料館展示品。長さ235cm、225cm、200cm、170cm、112cm、90cmの6点。